

ライブペイント・インタープリテーションの可能性を探る

—描きながら伝える新たな手法の構築に向けて—

森と木のクリエイター科 森林環境教育専攻 島崎 野乃子

1. 背景

幼少期の私にとって身近な自然の観察は、幸せな時間であり大切な居場所でもあった。その魅力を多くの人に伝えられるインタープリターになりたいと思い、森林文化アカデミーに入学した。

しかし私には大きな課題があった。人前で話すことが苦手なのだ。しかしどうしても自然の魅力を伝えたい。良い方法はないかと模索していた。

そこで思いついたのが、私が得意としている「絵」を「描きながら伝える」という方法だ。

得意な絵を介することで、自信をもって緊張せずに話せるようになり、参加者も伝えたいことが分かりやすくなるのではないかと考えた。

2. 目的

本研究では描きながら伝えるインタープリテーション（以下、IP）を自ら実践することを通し、

- ① 自分が緊張せずに伝えられるか
- ② 多くの人に興味を持ってもらえるか
- ③ 伝えたいメッセージを伝えられるか

を検証し、新たなインタープリテーションの手法としての可能性を確かめることを目的とした。

3. 研究の流れ

- ① 基礎調査（文献、聞き取り）
- ② 描きながら伝える IP の実践
- ③ 実践結果の検証、考察
- ④ まとめ

4. 基礎調査

まずは IP の現場でどんな手法が実践されているかを文献および聞き取りで調べた。

IP の先進国であるアメリカの国立公園では、以下のような様々な手法が実践されていることが分かった。芝居や演劇、コスチュームや暮らしを再現する手法、人形を使ったトークや人形劇、空想の旅（イメージ誘導）、ストーリーテリング、スライドトーク、楽器の演奏や歌、食材の採集や調理体験、生きた動物や毛皮や痕跡の紹介、パネル、創作活動、巣箱づくりや環境づくり、ネイチャーゲーム等のアクティビティ、など非常に幅広い手法があると分かった。

絵を活かした IP は、描きあがった絵を使っての解説や、参加者が絵を描く活動はあったが、絵を描きながら話す IP の実践例は見つからなかった。この手法が有効であれば、新たな IP 手法を確立することができるかもしれないことが分かった。

5. 実践

手法の有効性を確かめるため、異なる 3 つのタイプの関わり方で描きながら伝える IP を実践した。その結果を、自身や参加者の観察、現場のインタープリターへの聞き取りから検証した。

5-1. 実践 1 : BMB（誕生鳥）ペイント

まずは自分が好きな「鳥」をテーマに「1 対 1」でやりとりをしながら描いて伝える方法を実践した。

<プログラムのねらい>

「身近な鳥」の存在や面白さに気づく

<ゴール>

- ① 誕生鳥の探し方の秘訣を 3 つ言えるようになる
- ② 実際に自分の誕生鳥を見つける

<実施日、対象>

- ① 野外フェス『GO OUT CAMP』 2021 年 4 月
- ② もりもりキャンプ夏 2021 年 7 月
- ③ 翔楓祭（学祭） 2021 年 11 月
- ④ 『ミノマチャマーケット』 2021 年 12 月

*①③④は来場者 1000～3000 人規模のイベント。通りすがりの来場者を対象とした。

<ポイント・条件>

- ① 20 分で完結するショートプログラムにした。
→ 通りすがりの参加者に参加してもらうため。
- ② バードコールのボディにペイント。
→ イベント参加者が目をとめそうなアイテム。
→ すぐに使えて、家に帰っても継続するもの。
- ③ 誕生月の鳥(=BMB)の設定
→ 鳥を自分ごとにしてもらうため。
- ④ 有料体験（1 回ひとつ 1,000 円）
→ 興味関心の深さを確かめるため。

<流れ>

- ① 誕生鳥を選ぶ。
- ② 誕生鳥を確認。
- ③ 屋外で野鳥を見分けるポイントに質問や



クイズでやりとりしながら描き進む。

1. シルエット 2. 大きさ 3. 飛び方 4. 色・模様
5. くちばし 6. 足 7. 鳴き声

④ 覚えているポイントがあるかを確認。

⑤ 家の周りで「探してみてね！」と伝えて終了。

<参加者の反応>

参加後、母親に「メジロにミカン買って！」と話す子や、翌日「さっきトビ見たよ！」と報告しに来てくれる子など鳥への興味が湧いたと思える反応があった。

5-2. 実践2: 気づきや学びの見える化

プログラムのふりかえりの際に、参加者の発言を絵で描いて受けとめ、共有する方法に挑戦した。

<プログラムのねらい>

五感を使って自然をたのしむことを知る

<実施日、対象>

さいたま緑の森博物館ミニプログラム 2021年8月

<実施形態>

ふりかえりの場で、参加者が聞いた音(=気づき)をホワイトボードに絵で描きながら進行した。

<参加者の反応>

イメージが共有しやすくなったためか、聞いていた他の参加者がボードを見てうなずいたり、「ぼくも聞こえた！」と反応を返すような場面もあった。

5-3. 実践3 描きながら実物を観察する

野外で生きた実物を見ながら、ライブで描くことで、より深い観察を促すことに挑戦した。

<ねらい>

キャンプの森にやってくる身近な冬鳥に興味を持つ

<実施日、対象>

もりもりキャンプ

2021年12月

<実施形態>

望遠鏡で鳥を観察しながら子どもに形や色を質問し、子どもの反応を聴きながらホワイトボードに絵を描いた。

<参加者の反応>

何度もじっくり観察し、「ペンギンみたいな色してる！」と自分の言葉で伝えてくれた。次の日には子どもたちから、「昨日の鳥がまた遊びに来た！」と呼びに来てくれる場面もあった。



6. 結果・考察

6-1. 自分が緊張せずに伝えられるか

話している内容を絵にすることで、言葉だけよりも伝えやすく感じた。視線を手元に移せるので、私だけでなく参加者もリラックスしていた。

6-2. 多くの人に興味を持ってもらえるか

多くの通行人がブースの前で足を止め、1000円のプログラムが毎回すぐに満員になった。キャンプでも多くの子どもたちが観察に集まった。多くの人に興味を持ってもらえることを確認できた。

6-3. 伝えたいメッセージを伝えられるか

プログラムの中で気づきや学びを得ただけでなく、家に帰ってからも身近な鳥を探しに行くなど行動の変化も起こった。こうした結果から、伝えたいメッセージが伝わることも確認できた。

7. 新たな気づき

7-1. 描きながら話す手法が持つチカラ

描きながら伝える手法には次のような力があることが見えてきた。

話に惹きつける力、緊張をほぐす力、理解を助ける力、思い出しやすくする力、気づきや学びを共有する力、話を受け止める力、誤解を防ぐ力、観察を促す力、興味のない人と自然をつなげる力 etc...

7-2. 多重知能機能に通じる発見

回を重ねるごとに小道具や体験を取り入れた結果、参加者の反応が良くなった。これは「脳には8タイプの知能が存在し、得意な方向からアプローチすることで能力全体が伸びる」と提唱したガードナーの『多重知能理論』にも通ずる。言葉だけでは難しい人も、多様な手法を混ぜながら伝えることで理解しやすくなる。

さらに、このことは私自身にも起きた。描きながら伝えるうちに人前で話すことに少しずつ慣れ、伝えることを楽しめるようになっていたのだ。得意な絵を武器にすることで、少しずつ他の力も鍛えられ能力全体が伸びるのを実感した。

8. 専門家の評価

実践の結果を、日本インタープリテーション協会代表理事の古瀬浩史氏、アメリカ国立公園パークレンジャーの Todd Hisaichi 氏に見ていただいたところ、「参加者にも実践者にも良いことばかりの素晴らしい手法である」「さらにいろいろな可能性があると思う」等、とても高い評価を得ることができた。プロの目から見ても魅力的な伝え方であることが確認できた。

9. まとめ

以上の結果から、描きながら話す方法には、多くの人を惹きつけ、効果的にメッセージを伝えられる新しい IP 手法としての可能性が充分にあることを確認できた。また特技を活かすことで、伝え手自身も成長することができる手法であることが見えてきた。

私は4月から念願のインタープリターとして活動する。本研究を糧に、身近な自然の魅力を伝え続けたい。